

---

# 陰魔道師

CHAM

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陰魔道師

### 【Nコード】

N5834K

### 【作者名】

CHAM

### 【あらすじ】

数百年前、二つの異能集団の間で戦争が起きた。

己の中のエネルギーを具現化し、自然現象を作り出す異能、《魔術》を発明し発展させた《魔道師》と己の中のエネルギーを触媒とし、自然現象を操る異能、《陰陽術》を発明し発展させた《陰陽師》の間でのことだった。

きっかけは単純なもの、どちらが優れているか　ただそれだけだった。

その戦いは世界中いたるところで何年も、しかし、異能者達以外に

は気づかないように続いた。  
そして

戦争は陰陽師の敗北という結果で終わった。  
世界から陰陽師が1人また1人と消えていくのに対して、魔道師はその人口を増やし世界中に散らばっていた。  
こうして、陰陽師は滅びたはずだった

#### 【一応注意】

物語内の土地名・地名はたまたま同じなだけです。  
なので、「日本にそんなところねえよ。」というような感想はご勘弁願いたいです。

## 第一話 特殊な存在（前書き）

元々、自作ホームページでの作品でしたが、「小説家になろう」に書くに大幅に修正しました。

《内》に人名が書かれているときはその人物視点です。

## 第一話 特殊な存在

アッシュ・レンド・雷電<sup>らいでん</sup>

彼は特殊な環境にいた。

何が特殊か、まず名前からも分かるように彼はハーフである。

父親が日本の出身で、母親がイギリスの出身である。これだけでも少数派であるが、この程度彼にとってはたいして特殊でもなかった。問題は両親の家系の方にあつた。つまり

父親は陰陽師で母親は魔道師だつた。

この二つの異能集団は戦争によって仲良くするどころか、滅多に会うことがない関係だつた。

そんな世界でも珍しい状況に生まれた子供、それがアッシュだつた。彼は陰陽術と魔術の二つの異能の才能があつた。

これは実は珍しいことである。

なぜならこの二つは見た目は同じであるがその本質がまったく異なるからである。

陰陽術が己の中のエネルギーを触媒とし、自然現象を操るのにたいして、魔術は己の中のエネルギーを具現化し、自然現象を作り出している。

簡単に言ってしまうえば、植物の蔓や根を思<sup>つる</sup>うがまま操るのが陰陽術、掌から火の玉を出すのが魔術である。

今では珍しいとはいえ、戦争が起こる前には陰陽師と魔道師のハーフは多かった。

しかし、両方の力が使えたのは一握りだつた。

アッシュの両親はこれに喜び、アッシュに陰陽術と魔術の全てを極めさせることにした。

父親が病弱で、また、結婚により実家と絶縁状態のため両親はまずアツシュに陰陽術を教えた。

結果、アツシュは若干13歳で陰陽術を極め、そして父を失った。母親もその5年前に魔物に襲われているアツシュをかばって死んだ。天涯孤独の身になったアツシュは、母親の知人の魔術学校の理事長に魔術学校『マジフィック魔術学園』へ入学させてもらうことになった。

もちろん回りは魔道師の卵となる同年代ばかり、彼らは陰陽術がいまだ生きていることさえ知らない。

そして、戦後の教育によって陰陽師とは穢れた種族であるとされていた。

アツシュにとって信じられる存在はいない、そして陰陽術を使うことはできない。

このことがアツシュの心の中に不安を生み出し、また、陰陽術の修練と家庭環境によって殆ど同年代と関わる事がなかった彼にとって、学校に 同年代がたくさんいる所に行くということが、大きな希望を生み出していた。

魔術学校『マジフィック魔術学園』、そこにはアツシュにとって天国となるだろうか、それとも孤独な地獄になってしまうのか。どちらの道を進むかは彼次第である。

## 《アツシュ》

俺は母さんの知人でこの学校の理事長の人の好意によってこの学校、マジフィック魔術学園に入学することになった。

元々、母さんが死んでしまったことで、魔術を習う術を持たなかった俺にとってその提案はありがたいものだった。

学校でなら友人もできて、魔術も学べる。これは俺にとってとてもうれしいことだ。

ここなら、父さんと母さんの夢だった、『もう一度、陰陽師と魔道師と一緒に歩む世界』を創れるかもしれない。いや、創ってみせるんだ！

もう、俺にはそれしか二人にできることはないから…

## 第一話 特殊な存在（後書き）

誤字・脱字報告、感想をお待ちしております。



## 第二話 魔道師の卵（前書き）

前回に続いて説明が多いです。登場人物も増えます。

## 第二話 魔道師の卵

《アッシュ》

指定された教室に行くとき既に何人かの生徒がいた。

椅子を見るかぎりクラスは全部で30人か。

席は…自由かな？

「おい、その日本人！」

なんか変な言動が聞こえてくるが、無視する。

「その君だよ。ハーフだがなんだか知らないけど、ここは由緒ある魔術学校『マジフィック魔術学校』だよ。君みたいな穢れた存在にはいて欲しくないな。」

陰陽師のいる日本人全般を毛嫌いする奴がいるのは知っていたが、ここまであからさまなやつがいるとは思わなかった。

「何だよ、俺が何処で何をしようとお前には関係ないだろ。」

相手にする気はない。

こんな選民思想の塊と関わったって何もいいことはない。

「関係ないなんていえないな。君みたいな穢れた存在がいるだけでこっちは迷惑なんだよね。」

無視、無視…

「純粹じゃなければハーフか、どっちが日本人かは知らないがどっちにしる愚かな親だな。」

無視：するわけにはいかないな。

『デイ・フィオル・ル・ダン ファイヤーボール』

入学前に覚えた魔術で男を攻撃する。

初歩中の初歩のこの魔術なら死にはしないだろう。

『デイ・アクイ・マ・ジイ アクアウォール』

しかし、その魂胆は横からの魔術に妨害された。

「ちょっと、あんた入学早々何をしてんのよ。いきなり攻撃するなんて、もっと落ち着きなさい」

そこには顔が二つ、いや双子の女子がいた。  
妨害したのは左のほうみたいだ。

「何？おれはただ売られた喧嘩を買っただけだけど？」

「さっきまで無視してたじゃない！」

俺の言い方が気に喰わなかったのか、その女子が文句を言ってきた。

「まあま、メリアちゃん。落ち着いて」

双子の片割れがもう片方をなだめている。

「君達、僕を無視するな。」

さっきの奴、まだいたのか。

「何だ、女に護ってもらつといて、まだ何かいえるのか」

「バカにするな！僕はルート・オディマ・アドリナスだ！由緒あるアドリナス家の末裔だ。」

アドリナス家　陰陽師と魔道師の戦争で一番の武勲を挙げた英雄（陰陽師にとっては悪魔だが）の一族。  
こいつとは絶対に仲良くなれないな。

「名乗られたからこつちも名乗り返してやるよ。アッシュ、アッシュ・レンド・雷電だ。」

そこで教室に先生が入ってきた。

「はい、このクラスの担任のバーディ・ドリ・オーランです。これから六年間よろしく願います。」

ん？6年間？

俺が持った疑問は他の人も持ったらしい。すぐに1人前の席の人が手を上げた。

「先生、一年ごとにクラス替えがあると聞いたんですけど。」

「今年からなくなりました。一年ごとにこちらでクラス替えするよりも自力で友好の輪を広げて欲しいとのことです。」

つまり、コネは自分で作れと。

「それでは、本日は自己紹介と明日からの能力検定のために基礎知識の確認をしますね。この中には今まで魔術に触れたことのない人もいるでしょう。それではそこから自己紹介をしてください。」

そうして先生が指定された所から自己紹介が始まっていく。

「おい。」

隣から声をかけられたのでそっちを見ると特に特徴のない顔の奴がいた。

「さっきの見てたけど、お前すごいな。とてもハーフには見えないな。」

「あっそ」

結局こいつもあのルートとかいう奴と一緒に。

「ああ、悪いハーフって呼ばれるの嫌がってたな。」

「別にそう言うわけじゃない。」

何だ、普通の奴じゃん。

「隣の席なんだし仲良くしようぜ。俺はリーダー・ドグマ・ドゥーラって言うんだ。リーダーって呼んでくれ」

「アッシュって呼んでくれ。よろしくリーダー。」

こうして初めての友達ができた。

自己紹介も終わり、簡単な授業が始まった。

まあ、確かに今日初めて魔術に触れた奴もいるみたいだが、9割の奴は今日やる程度のことはやはりもう知ってるらしくほとんど隣のやつとしゃべったりして親交を深めている。

俺もリーダと話している。内容はまあ、よくある話題で「美人がいるか？」なんてベタなものだ。

先生も皆が聞かないことについて何も言わず、しかし、たまに適当な奴に当てていた。

「それではアツシュ君、魔術の種類と属性について簡単に答えなさい。」

「…大きく分けて三つまず、日常生活で使う“真魔法”次に回復や補助に使う“白魔法”最後に対人戦や魔物退治に使う“黒魔法”です。」

先生が頷いたのでそのまま続ける。

「次に属性は六つ、“火”“水”“風”“地”“雷”“光”でそれぞれ“火”は6属性最強の攻撃力を持っています。しかし、その反面他と比べると高度で魔力の消費が大きい。次に“水”は、単純に水と言っても純粋な水ではなくこの世の全ての液体のことで、強力

な酸も操ることが出来る。扱いやすさは6属性一だが、威力はちょっと頼りない。“風”は刃物の形状を取ることが多い。つまり術者の武器となる魔法が多い。また、補助系の白魔法の殆ども風の魔法です。“地”は扱いが難しいのが、防御力は6属性で一番強い。攻撃も速度は最も遅いが、威力はとても大きい。さらに“雷”は火の次に破壊力を持つ属性だが、それよりもこの属性で一番恐ろしいのは速さだ。普通呪文を唱えてから発動までは魔法の難易度によっての溜めが存在するが、雷にはその溜めが殆どない。戦闘で絶対的な優位に立てる。最後に“光”は白魔法の殆どを司っている。回復の魔法は100%光属性だ。そして、光の黒魔法は難易度が6属性の中で一番高く扱えるものは殆どいない。」

「はい、それで大丈夫です。では、ここで初めて魔法を作り出したというジョン・ディグマ・カルディーニが記した。魔術の属性についての文を紹介しましょう。」

そう言うって先生は黒板に文章を6つ書いた。

『火は全てを焼き尽くす存在。その業火の前に全ては塵となるのみ、後には何も残らない。』

水は全てを流しだし時には氷となって打ち砕く。千変万化する無形の存在。』

風は全てを切り裂く刃を持つ。また、あるときには我らに翼を授ける大いなる力となる。』

地は全てを支える強固な存在。水のような変化はないが、最強の盾になり得る存在。』

雷は全てを貫く槍を持つ。放てばそれは豹のように何よりも迅く駆け回る。

光とは全てを照らし出す慈愛。闇を滅し、我らを癒すことのできる特別な存在。』

へえ、おもしろい書き方だな。

俺は一応ノートにその文章を書き写しといた。そこで、チャイムがなった。

「それでは今日はこれで解散です。明日は能力検定なので休まないように。」

こうして俺の魔術学校の一日目は殆ど何もないうちま終わってしまった。目立たないようにすごそうと思っていたのにいきなり目立ってしまった。

はあ…



## 第二話 魔道師の卵（後書き）

説明へのもっていき方が無茶苦茶ですいません。  
精進します。

### 第三話 能力検定（前書き）

やっと投稿できました。

後書きに一応、魔術の呪文の解説を載せてみました。

### 第三話 能力検定

能力検定      その名の通りマジフィック魔術学園の生徒の能力を測定する一年の最初の行事である。一年生はこの行事のため、入学式後に簡単な魔法の授業を受けなければいけない。

測定するのは全部で三つ、『魔力量』・『魔術特性』・『戦闘能力』である。

《アッシュ》

「はぁ…」

「どうした、アッシュ？入学二日目にして溜息なんて？」

「いや、自分の行動にちょっと自己嫌悪して」

目立つつもりはなかったのにいきなり、喧嘩しちゃったからなぁ…

「ありゃ、しょうがない。俺だってあんなこと言われたら切れるよ。」

「…」

「どうした？」

「いや、なんでもない。」

やっぱり陰陽師がいた日本の血が流れているのは侮辱なのか…  
そこで先生が入ってきた。

「それではこれから能力検定を始めます。まずは魔力量を測定します。アイリーンから教卓のほうにきてください。」

バーディ先生の合図に従って最初の1人、アイリーンが教卓の方に言った。

教卓には不思議なメーターみたいなものがあり、一番下には手形がついている。

アイリーンは恐る恐る手形に手を当てた。

「それでは始めます。アイリーン、『マ・ルー』と唱えてください。」

ん？魔語が少ない。

そんなことを考えているとアイリーンが呪文を唱えた。

『マ・ルー』

すると、アイリーンの呪文に呼応してメーターが上がった。半分くらいのところでメーターは止まる。

「はい、結構です。だいたい平均くらいですね。では、次。」

なるほど、ただ魔力を発するための呪文か。それなら、確かに魔法の名前はいらないな。

「アッシュ・レンド・雷田、来なさい。」

なんて考えているうちに、俺の番になったもみたいだ。俺は教卓のほうに行った。

『マ・ルー』

メーターは四分の一程度で止まった。

「少ないですね、まあいいでしょう。次！」

は。俺の魔力が少ないのはわかっていた。

元々、陰陽師だからな。それでも、見下すような視線でこっちをル  
ートが見ているのは気に喰わない。

俺は少しイライラしながら席に戻った。

すると、リーダが話しかけてきた。

「気にすんなよ。こればかりはどうしようもないだろ？」

「魔力が低いのはいいんだよ。それよりあいつのあの目つきが気に  
いらねえ。それとさ、さつきから先生俺達の魔力について何か書い  
てるけど、あれってどうやって書いてんの？」 は より魔力  
が高い」とか？」

「ああ、魔力にはW<sup>ウィザード</sup>っていう単位が使われてんだ。まあ、こんなと  
きくらいしか使わないから皆気にしてないよ。大きさはメーター見  
れば大体分かるし。」

なるほど、そんな会話をしていると、メリアの番になった。

『マ・ルー』

その瞬間メーターが急激に上がりてっぺんまでいったかと思うと、  
メーターが爆発した。

「きゃ！何よ、古いやつなんじゃないの！？」

…そうゆう問題じゃない気がする。

「…なあ、アツシユ。」

「何だ？リーダ。」

「おまえ、昨日よく無事だったな。」

「…そうだな。」

俺はリーダに激しく同意した。もしあの魔力でファイヤーボール喰らったら…消し炭だよな。

その後はバーディ先生が新しいメーターを持ってきた以外には特に問題は起こらなかった。

ちなみにリーダとミイラは三分の二程度、ルートも結構高かったがメリアの後だとあまりすごくは感じられなかった。

ルートもそれをものすごく悔しがっていた。…ざまあみる。

「それでは次の検定に行きましょう。そうですね、今度は最後の人からやりましょうか。」

バーディ先生の指示に従って最後の1人ヤーンが出てきた。

術の構成の検定は六本の的をどのように打ち抜いていくかというもののだ。

ヤーンは単純な術を六発撃っただけで終わった。そして、ルートの番になった。

『ディ・アクイ・オディマ アクアドラゴン』

ルートの呪文に応えて水の龍が六本の的を破壊した。

「さすがミドルネームに魔語が入っているだけはありませんね。もう龍魔法が使えるなんて。」

魔道師の中には自分のミドルネームが魔語になっている人がいる。中でも龍魔法と呼ばれるのは威力が高いが、使用する魔力も多いのでルートが天才であるのは否定できない事実であった。

先ほどとは違い、自信満々の顔で席に戻るルート、俺はできるだけ普通の顔をするようにした。次にリーダーの番になった。

『ディ・アクイ・ドグマ・ウプ　アクアウィップ』

水を鞭のように変化させて六本の的を破壊したリーダー。

風ではないほかの属性を武器化させるのはとてつもなく高度なことだ。俺は自分の親友の才能の高さに驚いた。

そして、ミイラの番

『ディ・アクイ・ル・ダン・ティ　アクアボール』

何だ、普通の術じゃないかと思っていると、何とミイラのアクアボールは的の中心を正確に射抜くとそのまま曲がって他の五本の的の中心も撃ち抜いた。

《おおっ！！》

クラス中から驚きの声が上がった。

これはすごいもんな。

ミイラは恥ずかしそうに席に戻っていった。

メリアは特大魔法（実際には普通のファイヤーボール）で教室を少し焦がしながらも全部一気に破壊した。

そして、俺の番。俺はルートやリーダみたいな特別な術は使えないし、ミイラの繊細さやメリアほどの魔力も無い。でも、

『ディ・フィオ・ル・ダン ファイアーボール』

『ディ・アクイ・ル・ダン アクアボール』

『ディ・ウィン・ル・ダン ウインドボール』

『ディ・アル・ル・ダン グラウンドボール』

『ディ・サン・ル・ダン サンダーボール』

『ディ・ラピ・ル・ダン ライトボール』

周りの驚きが分かる。

そう、俺はどんな属性の術も使えるんだ。

そして、次はいよいよ戦闘能力の検定だ。

《ミイラ》

教室に静寂が訪れた。それも無理がないかもしれない。

それほど彼がしたことはすごかった。いや、言い方は悪いけど異常と言ったほうが正しいかもしれない。

光の黒魔法を使ったのもすごいが何よりもすごいのは全部の属性で威力がまったく変わらないことだ。

普通、火の魔術が得意な人は水の魔術が苦手というように必ず威力が弱まってしまう属性がある。これは才能や努力不足以前に魔道師としての常識である。



「…あいつなんて奴なの。」

「あ、メリアちゃんも気付いた？」

さすがメリアちゃんだ。彼女は実は解析が得意だったりする。魔術はおおざっぱなくせに…

「なんか今、ひどいこと考えなかった？」

「気のせいだよ。」

「ま、いいわ。でも、本当すごい才能よね。きっと歴史に名を残すわ。」

「うーん。でもなあ…」

なんか、彼は普通の魔道師にはない。変なオーラ見たいなものがあ  
るんだよな。

こう、内から放つんじゃないで、外から取り込んでいるような

「また、何か見だして…。あんたの『霊視』は確かにすごいけどあ  
んまり使わないほうがいいよ。」

「そうだね、もうやめておくよ。」

そついつて私は見るのをやめた。

### 第三話 能力検定（後書き）

呪文には4、5個の魔語という単語を唱えた後に魔術の名称を唱えることによって完成します。

最初の一語には魔術の種類を表すものを真魔法には“マ”黒魔法には“デイ”白魔法には“グ”をそれぞれ唱えます。

次に魔術の属性を現す魔語を唱えます。火の時は“フィオ”水は“アクイ”風は“ウイン”地は“アル”雷は“サン”そして光は“ラピ”です。

そしてその後に魔術の形状、効果を意味する魔語を唱えます。

例えば、今回出てきた魔語でいうと“ル”には球状、“ダン”にはまっすぐ進むという意味があります。

また、同じ名前の魔術でもさらに魔語を足すことで更なる効果を付属できます。

ミイラお唱えた“デイ”の魔語には自分のイメージした動きをするという意味があります。

## 第四話 誇りをかけた決闘

《アッシュ》

「それでは次に戦闘能力の検定を行います。全員、体育館に移動してください。既に他のクラスは終わっています。」

俺は先生の指示に従って、リーダーと一緒に体育館に移動しようとしたが、そこに近づいてきた奴がいる。  
もちろん、ルートだ。

「何かようか？」

「アッシュ・雷田、貴様に我、ルート・オデイマ・アドリナスは決闘を申し込む！！」

瞬間、クラス中に騒然とした空気が流れた。

俺も、ルートの言った言葉の意味を理解するのに少し時間がかかった。

その状態から一番最初に復活したのはメリアだった。

「あんた、何考えてんのよ！！」

メリアがルートに怒鳴りだした。

あいつを怒らせるなんてルートも意外と馬鹿だな。

が、ルートが気圧されたのは最初だけですぐにいつもの調子でしゃべりだした。

「先ほどの術の構成の検定をみて思ったのだ。こいつは光の黒魔法

を使えることが判明した。しかし、日本人魔道師の方がアドリナス家の末裔である私より優れているなんて認めるわけにはいかない。だから、貴様に決闘を申し込みたい。」

「いいぜ、やってやろうじゃん。」

「ちょっと！あんたまで何考えてんの？」

ミリアがおれにも文句を言ってきたが、俺も引く気はない。

「俺の親父は日本人だ。そして、病弱ですぐに死んじまった。」

そう言い出した俺をミリアが戸惑った表情で見ている。

いきなりこんなことを言われたら戸惑ってしまうのは分かる。でも俺はやめない。」

「それでも親父は俺に戦い方と信念を与えてくれた。たとえ記憶がおぼろげでも俺にとっては偉大な親父だ。だから……」

そこで俺はルートを睨む。

「俺の中の日本人の血を侮辱されるのは俺にとって親父を侮辱されるのと同じことだ。そして俺は親父を侮辱されておとなしくしているつもりはない！」

視界の端でリーダがやれやれって顔をしているのが分かった。ミリアもあきれた顔し、ミイラや他のクラスメイトは困惑した表情で俺達を見ている。

「決闘を受けてやる、ルート・オディマ・アドリナス。そして、二

度と親父を侮辱するような発言はさせない。」

体育館と言えば聞こえはいいがマジフィック魔術学校に普通の学校のような体育はなく殆どが戦闘訓練なので実際には武道館と言ったほうが正しいかもしれない

そんな体育館の中にある幾つかの闘技場のなかで俺とルートは向き合っていた。

よこでバーディ先生が呆れた顔で俺達のほうを見ていた。

「本当にいいんですね？」

「「はい。」」

俺達の返事にバーディ先生は溜息をついた。  
そこにもう1人男の先生がやってきた。

「俺は戦闘訓練担当のドーガ・グル・ラゴーラだ。アッシュ・雷田、ルート・オデイマ・アドリナス、お互いにその力の全てを振り絞って闘うことを誓うか？」

「誓います。」

「誓おう」

俺達はそれぞれドーガ先生に対して誓いを立てた。

「本来、一年に決闘は認めていない。よってこれはあくまで戦闘訓練として魔術は禁止する。この闘いの結果に不満があるなら四年になつてからやれ。武器は入学時に申請したものを模擬用に制作したものを使え」

そう言つてドーガ先生が俺達に武器を投げ渡した。

俺の武器は日本刀、ルートは剣だ。

まさに和と洋の戦いだ。

俺とルートは既に戦闘準備をしていてドーガ先生の言葉はほとんど聞いていなかった。

ただ、“魔法無し”というルールだけは聞き取ることができた。

「では、はじめっ……！」

ドーガ先生の合図を元に決闘は始まった。

ルートが剣を俺に向かってまっすぐ振り下ろしてくる。

俺はそれに対して刀を抜きながらの斬撃　抜刀術でルートより先に一撃を加えようとする。ルートは縦の斬撃、俺は斜め下からの斬撃だ。

そしてスピードは……俺の方が速い、入った！

キイインッ

しかし、俺の一撃は何か金属によって阻まれた。よく見るとそれはルートの武器である剣だった。

ルートは俺の方が速いことに気づいて一瞬にして攻撃を防御に変えたのだ。

しかも、こいつ…

「はあああっ！」

掛け声と共にルートは俺を吹っ飛ばした。  
なんてパワーなんだ。

そのまま、ルートは俺との距離を詰めてくる。そして……

「はっ！！」

剣を思いっきり振り下ろしてきた。

「がっ。」

何とか刀で防いだが、やはりルートの力は強く押し切られそうだ。

「もう、諦めたらどうだ？アッシュ。」

そんなことを言いながらルートが力を入れてくる。  
やばい、押し切られる。

負けたくない　ここからそう思った。

「があっ！」

力が強くなった。思わずうめき声を上げる。  
負けられない。親父への侮辱を許してしまうから。

命がけで俺に自分の技術を教えてくれた親父への侮辱を許すなんて、  
できない。

「うおおおおおっ！」

剣を無理矢理弾き飛ばす。そのまま、ルートの腹を蹴っ飛ばした。

「なっ！」

ルートが驚きの表情をしながらこちらを見て、すぐに構えなおした。長期戦は不利だ。次の一撃で決めるしかない。

ルートも雰囲気で察したようだ。

俺達は同時に間合いを詰めた。

「おおおおおっ！」

「はあああああっ！」

俺とルートそれぞれの一撃が交差した。

《メリア》

声が上手く出なかった。

二人が使っているのは模擬刀のはずだ。それなのに二人から発揮されるのは本物の殺気。

少なくともアッシュから発せられているのは本物だ。

何故、私達の年齢でそんなものが出せるのか分からない、でも…

「こんなの無事に終わるわけじゃないじゃない！」

先生に中断を進言しようとするとその手を誰かがつかんだ。

「邪魔するなよ。あの二人はいま避けられない戦いをしてるんだからな」



アツシュの友人のリーダだった。

「避けられない戦いつて何！？私達の年齢で何に命を懸けるっていうのよ」

「言っただろ？アツシュは父親の名誉を守るために、ルートはアドリナス家の人間としてそれぞれ譲れないものがあるし、護りたいものがあるんだよ。」

それに対して私は何もいえない。

「これは俺の父さんが言っていたことなんだけどな、男は簡単に命を懸けちゃいけない。でも、本当に大切なことのためだったら例え他人からみたらどんな些細なことでも命を懸けろってさ。」

「…なにそれ馬っ鹿みたい。」

「でも、俺もそう思うな。それに家族のために闘う男ってかっこよくね？」

「……………」

くやしいが否定ができない。

私とリーダが話しているうちに二人の渾身の一撃が交差した。

#### 第四話 誇りをかけた決闘（後書き）

終わりがすごい微妙な感じです。

誤字脱字報告、感想お待ちしております。

## 第五話 認めさせた想い

《アッシュ》

「…う、うん」

目が覚めると白い天井が見えた。

何で、俺はこんな所にいるんだ？

……だんだん脳が覚醒してくると、俺は飛び起きた。

「勝負は！？」

答えはすぐに返ってきた。

「引き分けだよ。お前は頭に一撃喰らって気絶してルートの脇腹に一撃喰らって呼吸困難。それで、両者戦闘不能で引き分け」

リーダの言葉に俺はほっとした。  
負けることはなかったのか。

「…アッシュ・レンド・雷田。」

その声に振り返るとルートが立っていた。

「何だ？」

「……………君の誇りを侮辱したことはすまないと思う。」

最初何を言われたのか分からなかった。

あのルートが自分の非を認めた？

「……………」

「やったじゃん、アツシュ。ルートにお前の力認めさせちまったじゃんか。」

…ま、よかったのかな？

「リーダー、次お前の番だぞ」

クラスメイトがリーダーを呼びにきた。

「了解。じゃ、行こうぜ、アツシュ。面白いものを見せてやるよ。」

面白いもの？

リーダーの戦闘スタイルは確かに面白いものだった。

体中に大量の武器を纏い様々な武器を同時に使いながら、相手を追い詰めていく。

相手が必死の思い出弾いても、すぐに次の武器が襲ってくる。

間合いを広げようとしても武器を投げつけそれを許さない

「さすがは、ドゥーラ家の人間だな。」

いつの間にか隣にルートがいた。

俺達の間にもうギクシャクした雰囲気は無い。それでもこいつと仲良くなることは絶対に無い。

ドゥーラ家 魔道師の中で唯一武道家として名を馳せる家だ。

陰陽師が魔道師に負けた理由は二つある。

一つは魔語による魔道師の呪文の短さ、簡単に言えば圧倒的な手数

の差。陰陽術は強力な術になればなるほど呪文が長くなってしまふ。しかし、魔術は魔語によって少ない言葉で強力な魔術を放ってしまうので陰陽術では歯が立たなかったのだ。

二つ目はドウーラ家とアドリナス家の存在。数多の武器を同時に使いこなすドウーラ家と龍魔法という一度に数百人を圧倒する魔法を開発したアドリナス家この二つの一族によってただでさえ不利だった陰陽師はいい気に敗北に追い込まれた。

「いや、さすがに武器多すぎだろ。」

圧勝して戻ってきたリーダに俺は率直な感想を漏らした。

「はは、いや本当は魔法で作り出せるんだけど、これはあくまで戦闘能力の検定だから。」

なるほど…

《リーダ》

アッシュとルートの決闘以外特に問題なく戦闘能力の検定は終わった。

「皆様お疲れ様でした。この検定の結果は明日、全員に配布します。」

「

先生が最後にそう言ってその日は終わった。  
次の日、

「アッシュ、どんな感じだった？」

「ああ、まあまあだな。」

そう言つて成績表を俺に渡す。

「魔力量がビリで、威力も下から三番目つて何だこれは!？」

「何が？別に間違つて無いだろ？」

「お前、全属性の魔術放つたことに対して何も書いて無いじゃないか！」

「ちょ、ちょっと！それって本当なの？」

俺の言葉を聞いてメリアも近づいてきた。

「私もミイラも備考の所に一言書いてあるのよ。」

そう言つて見せてきた紙には確かに『魔力は高いが精度は粗い』や『繊細なコントロールが可能』と書いてある。

「これでいいんだよ。」

有無を言わさぬ感じでアッシュは俺達に対していった。

## 第五話 認めさせた想い（後書き）

双子の名前をしっかり書いてないことに今気がつきました。

魔力が高いほうがメリア・フィ・シャクーンでもう片方がミィラ・

ティ・シャクーンです。

感想お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5834k/>

---

陰魔道師

2010年10月15日22時54分発行